

(論文)

## 宮澤賢治試論…童話作家「誕生」に関する一考察

〔時期・経緯・動機〕

横手拓治

### 〈要約〉

宮澤賢治は散文作者として、なぜ「童話」という形式を選択したのか。児童文学者賢治が登場する初発期の事情を考察していくなかで、本稿は、こうした問いに答えを求め、評伝上注視すべき観点に関心を払い、先行する諸説を併せて紹介しながら、賢治自身の内面に在った出来事を分析する。それらを通して、日本児童文学史上きわめて重要な作家の「誕生」に関し探求を行い、導き出された構成的説明を結論部に示す。

### 〈キーワード〉

宮澤賢治 結核 法華経 双子の星 銀河鉄道の夜

## I…序文

本稿は「宮澤賢治はなぜ童話作家になったのか」という問いに関する考察である。この問い自体はあまりに基本的・初歩的な印象を受け、そもそも考察対象としてあり得るのかという疑念すら抱かせる面があるのは承知している。それではなぜこうした問いを立てるのか。まずそこから説明していきたい。

童話<sup>1</sup>は詩<sup>2</sup>とともに賢治文学の二大ジャンルである。そのうち童話について、『新校本宮澤賢治全集』<sup>3</sup>編纂委員の一人、天沢退二郎は、講演や講座のさい聴衆から「賢治はなぜ童話を書いたのでしょうか」と時々質問されると述べている。一方、詩について同様の質問は受けたことがない、と記している。<sup>4</sup> 詩人への動機について興味が無いのに、童話作家のそれにはあるというのだ。

もっとも一般のこうした反応は、根拠のないことではない。韻文作者としての賢治については、比較的長いキャリアがある。短歌人としての初発は少年期と考えられ、盛岡中学の生徒だった一九一一年(明治四四)に本格的な制作がはじまっている。<sup>5</sup> その後、「短唱」とよばれる韻文形式——「冬のスケッチ」という一群——を経て口語詩へと移行、『春と修羅』(第一集)ほかに収められた作品群を成した。なかでも妹トシの死をうたった「永訣の朝」は有名だ。このあと晩年に向かい文語詩へと関心を深めていく。

はじめにあった短歌制作は、当時、少なからぬ日本人が取り組んで

おり、賢治もその一人だった。盛岡高等農林学校の三年生時の夏、賢治が仲間と創刊した同人誌『アザリア』では、短歌人としての賢治が記録されている。<sup>6</sup> そこから口語詩、文語詩へと続くのはごく自然なプロセスと見做された。だから疑問はない。「なぜ詩人になったのか」を質問する必要がないのである。しかも詩人といえば、賢治が登場する以前の時期、透谷、藤村、朔太郎をはじめ多くの先行文学者が活動している。

これに対して、「童話を書く」というのは、明らかに特殊である。誰もはやっていた、あるいは、文学志向の誰かが取り組んだ・取り組もうとしていた、という作業ではない。児童文学が「お伽話」を脱して自立的な芸術のジャンルに飛躍したのは大正時代、とりわけ後期であって(後述)、先行的なスタイルが充実していたわけでもない。「なぜ」が発せられる根拠の一つはここにある。そしてこの「問い」は童話作家賢治の重要性から諸学の研究俎上にあげられてきた。その系譜に連なる本稿は、先行する有力な説を紹介しながら、これまであまり検討されてこなかった観点を取りあげ、「問い」をより複眼的に見ていこうとするものである。

本書の構成を記す。童話作家・宮澤賢治の初発については、「一九一八年(大正七)夏」と「一九二〇年(大正九)」の二説がある。両者を紹介しながらまず時期を検討する。続いて童話創作をめぐる経緯を、最新の資料全集『新校本』の考証ほかをふまえて整理する。そのうえで、上記した「問い」について「答え」を求めていく、すなわち、動機についての検討を行う。これらが以下、本稿の辿る道筋となる。なお引用は、正確なものをへんで示し、「」は前後の文脈から著者が多少言葉を補った箇所として区別した。スラッシュ( / )は改行である。

## Ⅱ：時期について

童話作家の初発——童話創作のはじまり——には二説あると前述したが、そのうちの「一九一八年夏」は、賢治の弟宮澤清六が記した「兄賢治の生涯」（『兄のトランク』収録）に基づき措定されている。該当箇所を引く。

〈この夏に、私は兄から童話「蜘蛛となめくちと狸」「双子の星」を読んで聞かせられたことをその口調まではつきりおぼえている。処女作の童話を、まっさきに私ども家族に読んできかせた得意さは察するに余りあるもので、赤黒く日焼けした顔を輝かし、目をきらきらさせながら、これからの人生にどんな素晴らしいことが待っているかを予期していたような当時の兄が見えるようである。〉<sup>7</sup>

この証言は後年に記憶を辿ったものだが、「一九一八年夏」説の支持者は、これを事実として採用している。根拠は同証言であり、他に有力な傍証はない。他方、「一九二〇年」説に立つ側からすれば、証言は清六の記憶違いだとなる。ちなみに「一九一八年夏」説が主張される大きな理由として、記憶違いを質された清六自身が、最後まで期日の修正を付さなかった点が挙げられる。<sup>8</sup> 仲の良い兄弟として絶えず賢治の近くにいた清六が、「間違いない」としているわけで、説得力の高さはそこにある。実際『新校本』年譜篇では、一九一八年「八月」に清六の回想が記載されて、初発の事情を示している。<sup>9</sup> もっとも同記載は慎重に、〈宮沢清六

の「兄賢治の生涯」によれば〉〈これに従えば〉と二度にわたり但し書きを付している。なお、「大爆発」ともいえる賢治の童話創作の活発化は「一九二二年半ばころ」に生じている（後述）。「一九一八年夏」から「一九二二年半ばころ」までは三年程度だが、この間、童話制作に関する信頼できるエピソードは、現在の考証上、全体に乏しいという点は指摘しておきたい。<sup>10</sup>

続いて「一九二〇年」説である。「一九一八年夏」と「一九二〇年」の間には、妹トシ看病のための上京（一九一八年二月）、東京自立計画とその失敗（一九一九年二月）という小事件が挟まれるものの、童話作家初発という点では、この間にさしたる評伝的事項は見出せない。〈賢治は嫌々ながら家の手伝いをしたり、ひどい煩悶をしながら本を読んだりしていた〉という清六の記述が事情を概ね伝えていると考えられるが、同じ証言で〈内に燃えるような宗教と芸術の激しいほのおを燃やし続けていた時期かと思つゝ〉との追想はいくぶん注目を要するものといえる。そうして迎えた一九二〇年は、「大爆発」の前年にあたり、この年、賢治は散文表現自体に集中して取り組んでいた様子が見出せる。生前未発表ながら一冊に綴じ合わされ、通し紙番号が付された（ただし賢治の自筆ではない）作品群「初期短篇綴」があるからだ。このうち八作品——「丹藤川」<sup>13</sup>「秋田街道」<sup>14</sup>「沼森」<sup>15</sup>「柳沢」<sup>16</sup>「猫」<sup>17</sup>「ラジュウムの雁」<sup>18</sup>「女」<sup>19</sup>「うろこ雲」<sup>20</sup>——は、一九二〇年の成立とされる。「丹藤川」「女」「猫」は本文末尾に「一九二〇年」<sup>14</sup>、「ラジュウムの雁」「うろこ雲」は同「一九二〇年」<sup>15</sup>、「秋田街道」「沼森」「柳沢」は同「一九二〇年」<sup>16</sup>と記入してある。もちろんこの記述は単純に制作月というわけにはいかないが、清書原稿の末尾記載と

いうこともあり、『新校本』の年譜をはじめ、脱稿年月として一定認められている。

その一九二〇年、賢治は五月に盛岡高等農林の研究生を修了しており、八作品の成立月として推定されるのは、この修了(五月二〇日)前後から、せいぜい九月頃までとされている。八作品には掌篇小説ありエッセイあり、散文詩あり、童話ふうや記録ふうもあって、ジャンル分け不能というしかない。ジャンル以前の文章であり、習作ともいえないメモ的スケッチであって、賢治は筆の向くまま、思いつくまま綴った様子だ。もつともそのなかで「うろこ雲」は、「月光を吸ふつめくさの原」で、「へにやにや笑つてうたつてゐる」(銀の小人)が登場し、賢治童話の片鱗がうかがえる。また「なんばん鉄のかぶとむし」と、後年の賢治童話に特徴的な「うた物語」の形式も見えるのは注意を要する。<sup>17</sup>

翌一九二一年は賢治伝最大のトピックの一つ、無断上京事件が年初に起こった。父親との確執がついにのっぴきならない事態を招いたので。宗教上の対立は深刻度を増していた。賢治が日蓮上人の教えに入信(「正信に入る」・皈依したのは——正確にいえば、皈依を闡明したのは——、前年一〇月二三日とされる。保阪嘉内宛書簡に、「電ノ口御法難六百五十年の夜(旧暦)私は恐ろしさや恥かしさに顫えながら燃える計りの悦びの息をしながら、(その月夜の沈む<sup>マ</sup>迄座つて唱題しやうとした田圃から立つて)花巻町を叫んで歩いたので」とあるのを受けた指定である。<sup>18</sup>これによって父との対立は決定的になった。宮澤家は浄土真宗だが、父政次郎はその信仰が篤く、地元花巻の熱心な教徒グループ・仏教四恩会の中心的な運営者でもあった。その政次郎の方針のもと、宮澤家の日常生活は真宗

の教えに規制されていた。そのなかで入信がなされる。すなわちこれは、信仰にとどまらず「家への反逆」をあらさまにした行為といえよう。実家出奔の決定的な伏線がここに張られる。

賢治は上京後、本郷菊坂町に下宿したが、その彼がトシ発病の報を受け急遽帰郷したのは同年八月中旬から九月初旬とされている。このとき書きためた原稿がぎつしりつまった大トランクを持ち花巻駅に降りた。賢治は在京中、童話を多作したのだ。異常な創作意欲が湧き、書くより早く頭の中に言葉が浮かんでくるといふ一種のトランス状態にさえ賢治は陥ったといわれる。これが「大爆発」である。

もつとも、爆発的な創作のときが一九二一年のいつなのかは確定しがたい。午前は印刷所に勤務し、午後は一〇時まで、入信した国柱会で会員事務をしていたことを示す書簡<sup>20</sup>が残っている同年三月や、上京してきた父政次郎と関西旅行に出かけた四月(旅行中、短歌制作が多くなされている)は、「大爆発」のさなかという印象は薄い。これに対して、脱稿時期とおぼしき「19216」<sup>19</sup>が草稿末尾に記入された短篇「電車」「床屋」の存在や、国柱会奉仕時間を短縮して創作に打ち込んだことを示唆する(夜は大低<sup>マ</sup>八時頃に帰ります)と書かれた七月三日付保阪嘉内宛書簡<sup>21</sup>を考慮すれば、六、七月上旬には「大爆発」のさかかなにあったことが想定される。すなわち「一九二一年半ば」に「大爆発」があったとすれば、その前年五、九月に散文作品を集中して書いていたことは、童話創作の前段階として自然な結びつきが得られよう。実際、「初期短篇綴」には童話風のものも見出される。これらから「一九二〇年」説が示されるのだ。ではここで、両説を検討してみたい。作家誕生には助走期がある。

文学者は登場こそ周囲から見れば唐突な出来事であったにせよ、文章執筆、とりわけ散文執筆に突然の成熟というのは考えにくい。ある程度筆修業を経なければ、後年に残る作品を生み出す筆力を築けないのは、宮澤賢治という大才であったとしても例外ではないはずだ。実際どの作家にも無名時代(助走期)が必ずあり、それは年単位に及ぶのが通常である。この助走という観点をふまえれば、両説に関する見方は一つの像に結びつくのではないか。本格的な作品が群として成立するのが「大爆発」の時期であったことはほぼ間違いない。そこから逆算的に考えると、たとえば、作家としての習作始動期が「一九一八年夏」、ギアを入れて加速期になったのが「一九二〇年」といった想定は、あながち無理はない。すなわち本稿は、両者を「説」として別立てにする考えに異を唱えたいわけだ。そして、如何なる大才を秘めたにせよ助走期は一年程度ではすまないはずだと本稿は捉える。

ただし、清六証言にある「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」の登場を「一九一八年夏」と一応するならば、物語展開の骨法が成立している両作の脱稿がまずあり(X)、のちに、さまざまな散文表現を模索した断片的・習作的な「初期短篇綴」が成され(Y)、その後、童話創作の「大爆発」が起きた(Z)という時間的流れに、いささか首をかしげざるを得ない印象は出てこよう。Y↓X↓Zならひとまず腑に落ちるが、X↓Y↓Zはまるで「行ったり来たり」であって、ぴったりした理解に像を結ばない。

ただ上記「行ったり来たり」観は、XとYの存在にあまりに視点を集約しすぎた結果出てくるものではないか。XY以外にも賢治は助走期の習作に取り組んでいたはずである。それは「大爆発」の三年前くらいから

筆修業として行われていたと考えるほうが、散文作者の助走期間としては自然であろう。そうなると一九一八年頃から、彼は散文試作をくり返しており、そのトピック的な、やや不正確かもしれないエピソードが清六証言になる。——そのような推定が出来うる。「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」の現存草稿形が「一九一八年夏」に仕上がったというより、その初期表現が発現されたというのなら、充分ありうる話となる。本稿はこれを仮説として次項に筆を進める。

### Ⅲ：経緯について①

童話創作の助走開始時期を「一九一八年夏」としたうえで、本稿は次に評伝的な出来事を追いつながら、「童話作家誕生」の経緯に関する検討を行う。前項Ⅱでは散文創作の初発問題を取り扱ったが、それは「書き出し」に関する時期的探求であって、なぜ童話という形を選んだのかという「問い」に向き合うためには、より細かく時系的な探索が必要になる。本項の役割はそこにある。手がかりとなる語として、本稿は二一歳の賢治が発した〈あと十五年〉に注目している。一五年の命しか残されていないの意であり、早世へのおそれとおののきであった。それは青年賢治の背後におぼろに、またときにはつきりとあらわれる死の影といえよう(後述)。

一九一八年三月一五日、二一歳の宮澤賢治は盛岡高等農林学校を卒業する(当時は「得業」という)。四月一日には研究生として学校に残ることになった。この前後に、賢治は二つの忘れられない事件に出逢って

いる。一つは三月一三日に保阪嘉内が学校を除籍されたことだ。保阪は学内の同人雑誌『アザリア』と一緒に興した仲間であり、賢治にとって心を許せる無二の友といえた。除籍の理由は、保阪が『アザリア』に発表した一文が「虚無思想」に当たると受け取られたことにある。保阪を除籍に賢治は愕然となる。早速行動し、父に頼みこんで急遽嘆願書を出してもらったが、時すでに遅しだった。憤懣やるかたない賢治は、保阪を去らせるなら自分も去ると、退学の意を教師に伝えた。保阪庸夫「賢治と父」に記された、賢治の妹シゲの回想を引く。

〈その教授会?の席上で校長先生が「ほんとうの幸せとは何か、宮沢君からそれを聞こうじゃないか」と言われたと云ふたのが耳に残つて居ります。〉<sup>22</sup>

ここで〈教授会?〉というのは、賢治が乗り込み、そこで退学の意を宣した教師達の会議のこと。シゲの一文よれば、どうやら激した賢治の一方的宣言は、結局、校長によつて巧みにいなされてうやむやに終わった様子だ。なお退学処分を受けた保阪は盛岡を去り出京、明治大学へ入学し、牛込矢来町に住む。

もう一つの事件は、第一事件からしばらくあとの六月に起きた。〈肋膜〉の疾病診断である。七月一日付、賢治の父政次郎宛書簡から該当箇所を引く。(書簡で前文に続く箇所が前段の引用文、末尾にあたるのが後段の引用文。)

〈近来少しく胃の近く痛む様にて或は肋膜かと神経を起し昨日岩手病院に参り候処左の方少しく悪き様にて今別段に水の溜れるとか

云ふ事はなきも山を歩くことなどは止めよとの事にて水薬と散薬とを貰ひ候 本日学校を二三日休みて今少しはつきりとなりて出校致したき旨先生へ申し候処それならば鈴木医学士に見て貰へとの事に先刻同医師宅に参り候/診察の末只今は決して悪しと云ふことなきも殊マによれば確るやも知れず薬は矢張用ふる様且つ山へ行く前には必らず見て貰ふ様然らざるも毎週一回位は来る様にとの事にて尚只今の分析は差支なしとの事に御座候〉

〈到々私も弱みを生じ終り候 就れ来春よりは気仙郡あたりにても静なる仕事に従事致したくと専ら願ひ居り候/又仮令病氣となりても只今の仕掛けたる仕事のみは幾分結末を着くるを要し候。尚私のこの事は郡へは御話し下さらぬ様奉願候 先は〉<sup>23</sup>

胃の痛みを感じて不安になった賢治は、六月三〇日、岩手病院で診察を受けた。左の肋膜が悪いといわれ、医師は、「もう山歩きはしてはいけない」と賢治に諭した。心配になった賢治は、盛岡高等農林学校教授の関豊太郎に相談する。関から鈴木医学士をすすめられ、たちに再検査を受けた。翌七月一日のことである。診断はやはり肋膜の病疾であった。鈴木は言葉を選びながら、「今すぐ悪くなるということはない。ただ、ことによれば、という状態にあることは間違いない。薬はちゃんと飲むようにしなさい。岩手病院でも言われただろうが、山歩きはやはりやめたほうがいい。どうしても行くときは、必ず前もって診察を受けるように」と言ったと書簡中で報告されている。当時、研究生としての賢治の仕事は、稗貫郡土性調査を実施することだった。当然、「山歩き」は行わな

ければならない。趣味ではない（それもあつただろうが）、「山歩き」は与えられた仕事にあたる。しかし、医者はそれを「控えなさい」と言う。しかも鈴木は続けて、「これからは週に一回、受診しなさい」と告げた。本当に「いますぐ悪くなるわけではない」だとしたら、医師はこんなふう  
に言うだろうか——賢治のなかに暗い予感が広がったのは間違いない。

実は賢治周辺で先立つ小事件が起きている。六月二三日、同居中の岩田磯吉が肋膜炎の診断を受け、一時帰郷することになった。<sup>24</sup> 岩田は従弟で当時、盛岡高等農林学校の二年生だった。〈肋膜炎〉は賢治の身近に発症者を生んでいたのだ。その直後、今度は自分の身に発症の疑惑が生じたわけで、不安感が増す、心理状態になるもの想定できる。〈肋膜炎〉は悪化するれば、病名は結核となる。当時、結核は死の病だった。賢治の親族のなかにも、結核で生命を奪われた者が多々おり、療養中の身の者もいた（母の妹コトなど）。二二歳時の賢治が自身の結核について、どれだけ明確な自覚を持っていたかについてはいくつかの見方がありうるが、潜在的な不安感を抱きやすい環境にあつたことは確かである。結核という病気は、実際、最後に賢治の生命の火を消してしまうことになるが、その最初の兆候が二二歳の賢治に宣されたといつてよいのではないか。それが「一九一八年夏」に先立つ同年六月であつた。

診断結果を聞いて、両親の不安は大きかつたはずである。大事な長子に死の影がさしたのだ。そしてなにより、若い賢治自身のショックは大変なものであつたと思われる。〈仮令病気となりても只今の仕掛けたる仕事のみは幾分結末を着くる〉〈この事は郡へは御話し下さらぬ様〉の文が賢治の心理状態を示唆している。なお、この時期の賢治の心境を伝える伝聞が

残っている。『アザリア』創刊メンバーの一人で、賢治との繋がりが強い河本義行は、七月四日と推定される書簡に次のように記した。

〈宮沢氏は肋莫<sup>マ</sup>にて実家に帰つた。私のいのちもあと十五年はあるまいと。淋しい、限りなく淋しいひびきを持った言葉を残して汽車に乗つた。〉<sup>25</sup>

手紙の相手は保阪嘉内。『アザリア』の仲間で、同人の動静報告をしていたので。賢治は暗い予感にとらわれながら、花巻の父のもとへ帰つて行つた。賢治の生命が消えたのは昭和八（一九三三）年九月二一日だから、この時点から一五年と二か月半。〈あと十五年〉はほぼ正確だったことになる。死の影は未来の時間まで正しく賢治に耳打ちしたのでろうか。不気味なエピソードである。なお、賢治の身体に生命を長らえないかもしれぬ要因があることは、岩手病院での診察の少し前にも、別のところから告げられている。同年四月末、彼は徴兵検査を受けた。結果は第二乙種。このとき検査用ラップを賢治の胸に当てた軍医が「きみは心臓が弱いね」と告げ、この発言を賢治はいたく気にした。〈からだが無暗に軽く又ひつそりとした様に思ひます。〉と保阪に伝えている。<sup>26</sup> 賢治は当初第一乙だったが、「心臓が弱い」ことがわかつて第二乙に変えられたようだ。

前記もしたように、「一九一八年夏」に至る数か月間のなかで、賢治は、盛岡高等農林学校を無事卒業し、助手（研究生）として学校に残る道を歩み出していた。青春を脱し、一人前の大人へと社会的にも成熟をはじめめる起点に立ち、未来が拓かれるはずの時点を迎えていたことになる。そのタイミングで、無二の親友と離ればなれになり、そして「死」の

予感に直面しなければならなかったとしたら、どうであろう。そして、これと期を二いっにして、童話作家・宮澤賢治が初発を迎えたとしたなら。両者の関連性は、無視できないのではないか。「グスコープドリの伝記」や「銀河鉄道の夜」は、かけがえのない人物の餓死や溺死、そして自己犠牲としての死が作品を動かす要因をなしている。これら代表作の特徴を考えても、はじまりの地点に早世の予感・死の接近観があり、それを文学作品に昇華せんとする作家の、心理的導因を設定するのは無理とはいえない。

ただこの経緯を見て、一つの疑問が起こる。清六証言との整合性である。「誕生」時の賢治について、〈赤黒く日焼けした顔を輝かし、目をきらきらとさせており、〈これからの人生にどんな素晴らしいことが待っているかを予期していた〉と記した箇所だ。兄賢治は明るい未来を前にしていたと読める。〈私のいのちもあと十五年はあるまい〉という、〈淋しい、限りなく淋しい〉響きを持つ言葉を呟きながら実家へ戻って行った賢治。それがわずかひと月程度で、〈素晴らしいことが待っている〉人生を予期する表情を見せたわけで、引き裂かれた賢治像の背景にはいったい何があったのだろうか。双像について明確な答えは見出しにくい。ただ先行研究者の次の指摘は参考になる。『新修宮澤賢治全集』第八巻解説にて天沢退二郎は、〈童話を書きはじめた頃の詩人の魂はおそらく、清六氏の証言通りの未来への明るい希望と、死病への暗澹とした予感と、この激しい明暗交錯のあわいを揺れうごいていたにちがいない〉と賢治の内面を整理している(傍点原文)<sup>27</sup>。この見解に本稿は同意する。すなわち、幼い弟相手に「目をきらきらさせた」<sup>28</sup>「明るい」賢治は、一方で、内に悲劇的なほどの葛藤を抱いていたこ

と矛盾しない。人間は実存的苦悩を抱いたなかでも、他者に対し多面的にふるまうことは珍しくないはずだ。賢治がそれを極端に表わした可能性は、たとえば教師時代の自己韜晦的・演劇的ともいえる畸人ぶりからも、うかがえなくはない。

さて、一九一八年七月四日、自分の人生も〈あと十五年はあるまい〉と淋しく語った賢治だが、もともこのすぐあと、〈暗澹とした予感〉を取り払う出来事が起きている。賢治の妹トシは地元では才媛といわれ、日本女子大学家政学部へ進んでいた。二歳年下のこの宮澤家長女は、ひとりの肉親の位置を超えて、長男賢治の最愛の存在にまで達したとされる見方は、賢治文学の解釈上、スタンダードといえる。〈けふのうちに／とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ〉ではじまる、詩「永訣の朝」にみなざる緊張感と詩情の豊かさは、トシの死の絶対性がいかに深甚であったかを差し示している。トシは満二四歳で早世するが、死因は結核であった。〈あと十五年〉——賢治に淋しい人生の予感をささやきだした結核が、その五年後、深い兄妹愛の対象だったトシを奪っていくのだ。もとも一九一八年時点のトシはまだ一九歳で、死の影のなかにいるわけではなく、むしろ未来ある闊達自在の風気をもった女性である。

同年六月二日、トシは母の末妹・瀬川コトを東京京橋の古宇田病院に見舞っているが、実はこのとき、トシ自身も体の調子が悪く、大事をとって過ごしていた。体の具合を考えて、クラブ活動もやめている。トシの体調悪化は花巻の宮澤家にも伝わっていた。そのトシが七月一三日発の汽車で、花巻の実家へと帰ってきたのだ。当時、賢治は実家におり、療養中であった。一方、心配されたトシは、すでに健康を回復していた。



「私は無事可成丈夫にて勉め居り候」と、父政次郎宛書簡で事前に伝えてきたのだ。<sup>30</sup> 東京では体操や散歩といった軽い運動に加え、摩擦などに取り組んだ結果、授業の欠席もなく過ごせていた。妹が健康体で帰ってきたことは、兄賢治を喜ばせた。そして、わがことのように嬉しかったに違いない。自分の症状にしても一過性で、トシのようにすぐ元気になれる。そしてまた、土性調査などでの山歩きもできる……。明るいとシの姿を見て、賢治は死の影が振り払われる思いがしたのではないか。

不安から希望へ。賢治の心性が変わる契機となったもう一つの、決定的な出来事もあった。鈴木医師から、「これからは週に一回、受診しなさい」とわれた賢治は、その後も診察を受け続けた。そして、鈴木医師の診察を求め候処歩きても差支なしと申し候」と父に報告するに至る。調査のための山歩きも大丈夫との診断を受けたのだ。これは、賢治の七月二〇日付、政次郎宛書簡<sup>31</sup>で、近況を列記するなかに短記されている。その前に出した七月一七日の保阪嘉内宛書簡でも、「私は先日一寸肋膜が悪いと云はれて居ましたが今はすっかり治りました」と賢治は記しており、心境は通じる。<sup>32</sup>

六月中旬以前からただならぬ不調を感じ、六月三〇日、賢治にはつきり兆した死の影。しかしそれはわずか二週間ほどで、さっぱり晴れた。あれは幻だったのか。賢治には安堵の表情もありえたであろう。「淋しい」賢治から「顔を輝かした」賢治への転換は、この時点で起こったのかも知れない。だとすると、天沢のいう「激しい明暗交錯」というのは、心理現象だけにとどまらず、現実には死の影が（一時的に——後述）取り払われた事情もまた想定できよう。

#### IV：経緯について②

前項Ⅲでは「一九一八年夏」に先立つ時期、賢治は早世の不安に面前していた事実を述べてきたが、この問題をさらに検討し、「童話作家」を目ざす他の要因も探るためには、評伝的経緯のディテールをさらに注視する作業が要る。本項の役割はそこにある。そこでまず、『新校本』年譜篇の記述を中心に、一部既述の繰り返しになるが、一九一八年の年初から八月まで、賢治に関する鍵事項を簡条書きで次に記す。

- ※二月 一日 関豊太郎教授から、卒業後も研究生として学校に残らないか、と打診される。月の給料は二〇円位で比較的好条件。
- ※二月 一日 父・政次郎に対して、自身の徴兵検査を延期しないでほしいと主張する。父は徴兵を逃れるためにも、研究生として残るのはよい、と考えていた。
- ※二月 二日 父への書簡で、法華経行者としての立場を改めて明確にする。
- ※二月 二三日 徴兵検査の手続きをしてほしいと父に依頼。
- ※三月 一三日 保阪嘉内、学籍から除名される。
- ※三月 一四日 保阪を除名するなら自分も退学すると教授会で訴えたが、校長にやんわりいなされて終わる。
- ※三月 一五日 盛岡高等農林学校の得業証書授与式。賢治、卒業する。
- ※三月 二〇日頃 保阪へ書簡。末尾に「あの赤い経巻は一切衆生の帰趣で

ある事を幾分なりとも御信じ下され本気に一品でも御読  
み下さい。そして今にも教へて下さい。と記す。赤  
い教巻とは先に送っていた島地大等編著『漢和対照 妙  
法蓮華教』のこと。

※春(時期不明) 菜食を主とするようになる。私は春から生物のからだを  
食ふのをやめました。と保阪あて書簡にある。

※四月 一日 盛岡高等農林学校へ研究生として入学。

※四月 一八日 級友だった佐々木又治あて書簡。なかで「私ハ後ニ兵隊  
ニテモ行ツテ戦ニモ出タラコソナ事ヲ思ヒ出スダラウト  
思ヒマス。」と記す。「コソナ事」とは、賢治のために、  
父親が背囊のなかへ薄荷糖をそとに入れておいてくれた  
ことを指す。

※四月 一八日 級友だった成瀬金太郎あて書簡。法華経に帰命し奮励  
することを勧める。

※四月 三〇日か 徴兵検査。賢治は第二種であった。「君は心臓が弱いね。」  
と軍医に言われ、賢治は「へからだが無暗に軽く又ひつそり  
とした様に思」つたと記す(保阪あて書簡)。

※五月 一〇日 盛岡高等農林学校で実験指導補助を嘱託される。関教授が  
賢治の身分を保証しようとしたもの。給費は年額一五〇円  
ほど。ただ賢治はこの仕事に乗り気ではなかった。

※六月 二〇日頃 保阪あて書簡のなかで、「不孝の事ですが私は妻を貰つ  
て母を安心させ又母の働方を軽くすると云ふ事を致しま  
せん。」と記す。妻帯否定の理由は、法華経信仰の道に  
入るためとしている。

※六月 二〇日

父あて書簡で、研究生として行なっている土壌分析の  
仕事は自分に適していない、と記す。「先生は私は本統は  
分析等には余り適せず一人にて本を読み考へて居る事  
最適なる由をも申され候」とし、関教授からも不適を示  
唆されている旨、伝えている。

※六月 二二日

父への書簡で、自身の「副業」として、「例へばセメントの  
原料を掘りて売るとか」などと具体的な提案をする。

※六月 二三日

盛岡で同居していた従弟の岩田磯吉が一時帰省する。  
数日前より胸痛があり、岩手病院で薬を受けていたが、  
二二日、肋膜炎の診断となったため。

※六月 二四日

父あて書簡で、工業原料の売買に関する事業を提案する。  
しかし、自分が経営をやると人との取引が苦手で失敗  
してしまう、とも書く。もし実家で新事業を行うとし  
たら、自身を技術者として使ってほしいという。

※六月 二六日

保阪あて書簡で、「あなた自らの手での赤い経巻の如来  
寿量品を御書きになつて御母さんの前に御供へなさい。」  
と説く。

※六月 二七日

保阪あて書簡で、再び法華経の教えを説く。  
岩手病院で診察。肋膜炎の疾病を指摘される。結核の  
はじまりとされる。

※六月 三〇日

河本義行から保阪への書簡で、賢治の消息が伝えられる。  
「私のいのちもあと十五年はあるまいと。淋しい、限りなく  
淋しいひびきを持った言葉を残して汽車に乗つた」と。

※七月 四日

この日、賢治は静養につとめるため花巻の実家へ帰った。

この実家静養中、農林学校を退学する相談があったとされる。

※七月一四日 トシ、花巻の実家へ帰省する。

※七月一七日 保阪あて書簡で、肋膜炎が悪いとされたが、今はすっかり治りました」と記す。

※七月二〇日 関教授の私宅を訪問し、退学したい旨を伝える。

※七月二五日 保阪へ書簡。なかで以下を記す。〈私は先日肋膜炎がどうも工合悪くなりさうだから山歩きを止めると云ふ医者勧めと父が病気な為により学校へはもう行かないことにきめました。けれどもとにかく予定の地質調査はするつもりでぬます。／＼これからさきとても私には労働らしいことはできません。一昨日等も歩きながら胸が苦しくて仕方なかったのです。〉  
満二二歳となる。(戸籍簿の通りとした場合)<sup>33</sup>  
※八月二四日 実験指導補助の職を解かれる。この措置は賢治の願いからであった。

※八月(推定) 保阪へ書簡。なかで以下を記す。〈私は長男で居ながら家を持つて行くのが嫌で又その才能がないのです。〉

列記の煩はあったかもしれないが、このリストが、童話作家・賢治の初発前夜における出来事のあらましである。注目すべき言葉がこのなかに点在している。

Ⅲ項の記述をふまえ、まず七月二五日の〈胸が苦しくて仕方なかった〉

を挙げねばならない。先に、〈あと十五年〉のいのちを覚悟させた病気は、〈すっかり治りました〉と、賢治が保阪嘉内に伝えた経緯を紹介した。しかし、同じ保阪あて書簡で、わずか八日後の文面は、〈胸が苦しくて仕方なかったのです〉が記載される。再び死の影が賢治を襲っているのだ。関連して別の証言を紹介しておく。盛岡高等農林学校の助教授、小泉多三郎はこの夏、賢治と二緒に林業調査に出かけた。北上川水系の豊沢川などの川筋を踏査する「山歩き」だった。七月の下旬から八月の中旬の頃で、猛暑のなかだったという。時期を考えると、鈴木医師の太鼓判〈歩いても差支なし〉を受けての山行とも考えられる。山行中、賢治と対話し続けた小泉はその博学に驚いたという。それとともに、彼は異様な賢治のすがたを覚えていた。

〈鉛温泉の後の山を越して石鳥谷方面へ出る時、夏の盛りに僕などは文字通りの流汗りんりであったが君は寒いと云ひだした。そこで君の体は常人とは全く反対だ、医者に診断して貰ふてはどうだとすゝめた事を記憶して居る。〉<sup>34</sup>

猛暑の夏に「寒い」と言い出すのは明らかにおかしい。自覚症状があるのだ。〈すっかり治りました〉は仮装であり、賢治はひそかに独り悩み続けていた可能性もある。耐えきれなくなった彼は、心を割って話せる保阪に仮装を解き、「胸が苦しい」を告白した。それが七月二五日付の書簡文ではないか。とすれば、「一九一八年夏」を迎える時期、賢治の心は不吉な死の影をずっと捉えており、それを深く刻みながら作家は筆を執りだしたことになる。

さて、リストをあたるなかで、作家誕生の鍵となりそうな言葉を他に拾ってみたい。重要と思えるものが三つある。

第一は「法華経」である。それは賢治の文学史にとって決定的なテーマであった。賢治の童話は法華文学と称されることもある。その童話には実際、語彙やテーマに至るまで、法華経の影響が複雑に折り込まれており、法華文学の問題はすでに個別考究が堆積している。たとえば「銀河鉄道の夜」の分析のなかで西田良子は、「諸法実相」「一切皆空」の法華経的認識に立ってすべての事象を「現象」とみる時、それらの「現象」をひきおこしている様々な因縁の、不思議な複雑なからみ合いに驚嘆し、自分自身もその一部になり、外界と自分が一体化してしまったような、あの、神秘的な、奇妙な感覚を、賢治はマラルメの「目がくらみ総気立つ」という表現に触発されて、「だまつて見てみると何だかその中へ吸い込まれてしまふような気がする」という言葉で表現したのである<sup>35</sup>と述べているし、「銀河鉄道の夜」論ジョバンニの切符<sup>35</sup>、また吉本隆明は、銀河鉄道の汽車のなかでジョバンニが手にした「ほんたうの天上へさへ行ける切符」、「天上どこぢやない、どこでも勝手にあるける」通行券は法華経であった<sup>36</sup>と示している(ジョバンニの父とはなにか<sup>36</sup>)。もちろんこれらは、賢治作品と法華経との深い関わりを指摘した、膨大な(ほとんど「銀河」級の)論点中ほんの二例にすぎない。

法華経信仰は賢治にとって最重要な創作エネルギーになったことは疑いえない。その法華経への傾倒を示すくだけだが、「作家誕生」の前夜とおぼしき時期に継続して見出せる。この事情はやはり押さえておきたいところだ。

鍵となる言葉として第二に「退学」が挙げられる。学業の断念である。研究生として学校に残り、学問の世界で生きていくことも思い描いていた賢治にとって、それは自己否定ともいえる事態であった。実は中学卒業時、賢治は成績が芳しくないこともあって(後述)、上級学校への進学は許されなかった。宮澤家の長男として家業(質・古着商)を継ぐ人生が待っていた。学友は一高や早稲田に進んでいる。自分だけが実家の店番であり、取り残された心境に陥った賢治の憤懣は当時の短歌作品に見える<sup>37</sup>。賢治はこのまま故郷で家業に収まるのを潔しとしない気概にあふれていた。やがて受験を許されると、浪人の彼は猛勉強をして盛岡高等農林への入学を果たす。入学後も学修に精励したのは、卒業式のさいに行われた特待生選定に選ばれていることから判る。学業優秀者として、賢治は卒業後も研究生として学校にとどまった。

関連して、賢治の学生時代を中学まで遡ってみたい。盛岡中学時代の彼はぱつとしない生徒だった。成績はだいたい中位。博物はよくできた。国漢もいいほうだった。一方、数学は不出来だった。後年、理系の上級学校である農林学校へ進むのに、自然科学の基礎学問ともいえる数学が不得手で落第点もとっていたらしいのは目を引く。ほかに苦手といえば体操もあった。賢治は超がつくほどの運動音痴だったのだ(これらは阿部孝「中学生の頃」、沢田藤一郎「中学の頃の賢治君」に拠る<sup>38</sup>)。他に目につくのは、文才が評価されていた点である。盛岡中学の「大正三年三月卒業生調」<sup>39</sup>では、担任教員による成績評価が列記されているが、人物評価にあたる「備考」のらんに「文才アリ」の記述が二度見出される。一年から五年生まで、「伶俐」の記載は一貫し、これに加えて二年には「狡

猶、五年に「ヤ、放縦」が、そして「文才アリ」はこの間の三年と四年に記される。

いずれにせよ賢治は中途半端な学力をもって中学を出た。上記したように、そのなかから奮励努力をもとに高等農林へ進み、卒業時には研究生として残る存在に至ったのだ。それは願ってもない人生の展開だったのか。どうもそうではない。晴れて研究生となった賢治はそれに満足し没頭している様子に乏しい。ミスをして指導教官に叱られることもあったという。「私の様なぼんやりはとも定量分析などの様な精密な仕事をする資格がありません」と、書簡を通して保阪に訴えているし、身を入れて研究に従事しているとは思えない様子がある。独立心の強い賢治は研究室での徒弟的作業に耐えられぬものを自覚したのか。保阪の退学事件などから、学校への不満が残っていたのかもしれない。これらが合わさり、せっかちな面もある賢治はついに退学したいと言い出したようだ。

最初の童話を読み聞かせたのに近い時期、結局賢治は、自らの願い出によって、実験指導補助の職を解かれている。この職は、上記リストにある通り五月一〇日に囑託されており、関教授の期待と厚情が賢治に注がれていたことを示す。と同時に、実験指導補助職は、学者・研究者への道を約す切符のようなものであった。それを、わずか三か月半で賢治は自ら放擲する。解職は八月二四日。それはまた、厭がっていた家業へ、質・古着商店の店番へと戻る立場になった瞬間といえよう。

もともと、研究者から家業を背負う道へと方向を転じたあとも、すぐに研究生生活から離れたわけではない。稗貫郡から委託された土性調査が賢治には残っていた。実験指導補助職を解かれたのちの九月にも、彼は

稗貫郡東北部の土性調査に出かけている。調査は順調にすすみ、二二日には予定より一日早く早池峯山の調査を終えたようだ。賢治はさらに足を伸ばし、二四日には雨まじりの強風のなか山行を続けた、と父に葉書で伝えている。<sup>41</sup> 学業を捨て家業へ就くことを選んだ賢治だが、土性調査のあとも実際には学校に籍をおいたままでおり、結局、一九二〇年五月の修了まで在籍している。修了のところに助教授への推挙の話もあったというが（父による学校への寄付行為を伴う話だったらしい）、学者への道を断念した賢治の意志は明確で、辞退している。

さて、鍵となる言葉の第三は、「妻帯否定」である。ともに保阪宛書簡にある、「私は妻を貰つて母を安心させ又母の劬勞を軽くすると云ふ事致しません」と、「私は長男で居ながら家を持つて行くのが嫌で又その才能がないのですが、前者はあたかも保阪を「折伏」しようとしている勢いの文面のなかで記載された一文であり、後者はさまざまに近況を報告するなかで示された心境の一つとなる。

関連して、続く九月二七日の保阪あて書簡にある次の記述を引く。

「小生も事情さへ許すならば出京勉強致し度く候へども只今の処には家事上並に身体上の都合に依り蓋<sup>フタ</sup>ろ小生を以て可能とする範囲の労働に従事致すを以て最適とする次第に御座候／最早林業にても農業にても小生に小生の家庭（父母）が希望する職業に於て小生の家に対する本務を尽し度き考に有之候／但し今後の繋累は断じて作らざる決心に御座候」<sup>42</sup>

満二二歳になっていた当時の賢治が、夢や希望を捨て、侘びしい人生への道筋を選ぶ理由として、「家事上並に身体上の都合」をあげている。

〈家事上の都合〉とは、家業を背負う長子としての立場を指すのであろう。実際、〈小生の家に対する本務を尽し度き考〉を賢治は表明している。

〈身体上の都合〉は、本書でこれまで述べてきたことで、早世の予感を伴った自身の宿痾をいうのであろう。ただこの引用中、暗く、受け身の態度のなかで、ただ一つ意志的なものが見えた。〈繫累は断じて作らざる決心に御座候〉である。法華経行者としての信念に加えて、病身を抱える身との自己意識が強まり、ついには断念の強烈な意向が示されたと思われる。研究者生活、長男としての役割も背負った家庭の構築……二二歳の賢治は、責任を果たし落ち着いた生を導くこれら将来の状況からことごとく決別し、侘びしい人生へ下降せんと意を確かにしていたのだ。

これらが、出発点とおぼしき「一九一八年夏」、賢治の身体と精神に到来していた事態であった。あとはこれらを咀嚼し、童話作家・宮澤賢治の誕生を考察する作業が残されている。

## V:: 動機について (結論)

Ⅲ、Ⅳ項をふまえ、本V項では、冒頭の「問い」に答える目的から、宮澤賢治が、表現者としての態様を童話作家に定位させた動機について検討する。「誕生」に関わる研究史もふまえて、以下、A〜Eに分類し説明していきたい。A:: 自子代償説、B:: 法華文学説、C:: 文学潮流説、D:: 早世意識説、E:: 資質論である。なおA Bは童話選択の理由として研究史上、中心的に唱えられてきた説であり、Cも一定の研究実績が重なる。Dは本稿が注目する観点だが、いうまでもなく、すでに言及は

なされており、新説というわけではない。A B Cに比べればマイナーだが、かなり重要ではないかと本稿は捉えているというわけだ。Eは根本的な論議だが、代表的な見方を一つ示す。

### A:: 自子代償説

この説は専ら、『兄のトランク』に出てくる、清六の次の証言を引用することで説明されている。トシ発病の報を受け、大トランクを持って花巻に帰郷したときのエピソードである。トランクのなかには童話を中心にした原稿がたくさん入っていた。賢治はその原稿を取りだして読みながら、こう語ったという。〈童児わらしこそさえる代りに書いたのだもや<sup>43</sup>〉。すぐ判るように、これはⅣ項で示した第三の鍵言葉「妻帯否定」と繋がる。子どもを持たない、その代わりに、まさに「子ども」としてこれらを書いたというわけで、なぜ童話でなければならなかったのか、理由の一端が見出せる。

### B:: 法華文学説

Ⅳ項の鍵言葉の第一「法華経」に関わるのがこの説である。無断上京事件を引き起こして故郷を離れた賢治は、着京後、国柱会の活動に参加する。やがて熱心さが認められ、賢治は理事・講師の高知尾智耀と信仰談が交わされるようになった。その回想によれば、賢治は詩歌文学を得意とするといったので、高知尾は、〈その詩歌文学の上に純粹の信仰がにじみ出るようであればならぬ〉という話をしたという。<sup>44</sup> 賢治はのち「雨ニモマケズ」が記された手帳のなかで〈高知尾師ノ奨メニヨリノ1、法華文学

ノ創作」と記した(一三五頁)。対向の一三六頁には〈妙法蓮華經全品〉と赤鉛筆で書いている。そうなると「法華文学」という位置付けは、賢治自身が後年のノートにて自ら行なったことになる。民衆布教に積極的な国柱会と関わるなかで得た方向性であり、自得のためではなく、一般への啓蒙の目的を抱いた布教文学の志向といえた。これが賢治の関心・志向もあり、その対象をまだ心の柔らかい子どもに向かわせ、童話作家を誕生させたという理解である。

### C…文学潮流説

賢治が文学に取り組んだ時期は、日本における近代児童文学の興隆期だった。明治期の児童向け物語は「お伽話」といわれ、兄にあたる年長者が小さい弟妹を喜ばせようとして語るスタイルをとっており、教訓色も強かった。創作もあったが、既存の国内外の昔話や寓話などをわかりやすく再話した作品が多くを占めた。ここから自立した芸術を目ざして児童文学は急成長していく。「お伽話から文芸へ」質的な転換がなされたのは大正時代である。浜田廣介、小川未明、坪田譲治といった旗手たちが次々とデビューし、「むく鳥の夢」「赤い蠟燭と人魚」など現在でも読み継がれる作品が登場した。児童文学史のエポックである鈴木三重吉主宰『赤い鳥』が創刊されたのは一九一八年(大正七)。まさに「一九一八年夏」のその年である。児童文学は、賢治が作家として活動をはじめたとされる時点で、一気に存在感を増した文学のニューフェイスだったのだ。散文の筆を執りだした賢治にとって、気にならないはずはない。

これらの事情は、IV項の鍵言葉第二「退学」と結びつけて考えられないか。すなわち職業の問題である。賢治は学者への道を放擲した。

一方、家業に就くのは嫌だった。そうなると何らかの職業を他に目ざさねばならない。東京に出て起業活動を行うプランは父親の反対に遭い実行の門は閉ざされている。八方塞がりのなかから一つの可能性が浮上した。児童文学作家への道である。同時期の児童文学の興隆は、〈文才アリ〉と中学時代の教師にも指摘された賢治が、職業としての「物書き」を志向する契機を成した可能性は小さくないはずだ。実際、賢治は後年、活発な投稿・売り込み活動を行っている。その時期は、童話作家として爆発的な制作力をみせた一九二一年半ば以降であった。『赤い鳥』も投稿対象だったが、賢治の文学は同誌のカラーに合わず、採用はなされず仕舞いとなっている。「一九一八年夏」の賢治は、自身の資質にも合致する同時代の文学潮流に背中を押され、「童話」という形を選択したという見方には、一定の説得力があると考えられる。

### D…早世意識説

これは本稿が強調したいところで、Ⅲ、IV項でいくつか材料を示した。Aとも重なる見方だが、〈才能がない〉とまで断じて生家の桎梏からテイクオフを望むモチーフが強いAに対して、Dはより内面的で暗鬱な自己認識と認めるべきである。早世の思いが、未来のある子どもに、自分の夢や理想を託す志向に結実し、創作童話という形式を求めたと捉えるのがこの説といえよう。幼い弟に、〈目をきらきらさせながら、これからの人生にどんな素晴らしいことが待っているかを予期していたよう〉に語ったという賢治のすがたは、起点に立つ作家の早世意識の強さを、却って示唆するものではないか。

## E: 資質論

これは「なぜ」という問い自体を溶解させる論点といえよう。すなわち童話志向は賢治の資質のなかに、本源的にあり、賢治は自然と童話に向かったのだという考えである。この立場に拠る代表的な見方を、唐木順三が示している。一九五一年(昭和二六)五月、「中学生全集」の一冊として筑摩書房から『宮澤賢治選』が刊行されたが、その編集と解説者を務めたのが、唐木だった。彼の解説中には、賢治文学の「形式」について、文芸評論家としての興味深い指摘がある。

〈賢治は、自分自身の欲にとらはれたり、自分一人よければと思つたりするひとたちにはなんの興味をもたず、ただ「しやくにさはつてたまらない」ばかりです。さういふ連中が早くなることを願つておました。ところで近代の文学は一般に、さういふ人間に興味を感じ、さういふ人間を描いたものが多い。したがつて賢治が自分の文学形式として、近代文学とはちがふ形式をとらざるをえなかつたのは当然といはなければなりません。〉<sup>45</sup>

賢治文学の理想主義と孤立性について鋭く論じたわけだが、童話という形式の選択は、賢治の原質に宿った傾向と深く関係があるという立場である。

これらのうち、Eは基底的要因、Bを思想的動機、AとDを実存的動機、そして、Cを実際の動機と分類することがひとまず可能であろう。そのうえで配置を試みれば、Eが基層を成し、その上にBとA・Dが互いに影響を及ぼしながら乗り、さらにその上にCが乗って、全体で動機、

すなわち童話を選んだ作家像が構成される、という理解が出来る。「一九一八年夏」という仮説に立ち、「なぜ童話作家になったのか」という問いに対する答えとして、この構成的説明を示すのが本稿の結論となる。なお本稿はさらに、「一九一八年夏」説から離れても、概ねこの理解は成り立ちうるとも考えている。また、最も高い「上部構造」を成すといつても、Cが重要ではないという意味でないことは付言しておかねばならない。

## 引用文献・注

- 賢治自身は「少年小説」等の表現も使っているが、本稿では子ども向け散文作品の意として、広義にて「童話」を使用する。なお、「少年小説」は、「ポラーノの広場」など四篇をそう総称した賢治のメモに拠るが、このメモは、四篇が童話でないと主張しているわけではない点は、天沢退二郎も「賢治童話」とは何か(後述)で指摘している。
- 賢治は「心象スケッチ」の語を頻繁に使うが、こちらも広義にて「詩」とする。
- 筑摩書房、1995～2009。以下、『新校本』と略称する。
- 天沢退二郎「賢治童話」とは何か、國文學編集部編『宮澤賢治の全童話を読む』學燈社、2008、p.7
- 賢治の短歌制作は、研究史上「歌稿B」と称される作品群に対する考証に基づけば、一九〇九年(明治四二)四月まで遡れる。当時の賢治は一二歳で、盛岡中学入学がその四月にあった。
- 一九一七年(大正六)七月刊の創刊号で、賢治は「みふゆのひのき」二一首、「ちゃんがちゃがうまこ」八首を発表した。同号ではほかに短篇『旅人



- のはなし』から」が収録され、こちらは研究史上「初期断章」に分類される創作文だが、寓話のニュアンスはあるものの、童話としての位置づけは難しい。
- 7 宮沢清六『兄のトランク』筑摩書房（ちくま文庫）、1991、p.251  
最新版といえる宮沢清六上掲書（文庫）でも修正はない。
- 8 『新校本 宮澤賢治全集』筑摩書房、第一六卷（下）年譜篇、2001、p.161。ただし、回想自体は「この夏」となっており、「八月」ではない。  
\* 『新校本 宮澤賢治全集』は以下『新校本』とする。
- 9 『新校本 宮澤賢治全集』は以下『新校本』とする。
- 10 『新校本 宮澤賢治全集』は以下『新校本』とする。
- 11 宮沢清六前掲書、p.251  
同上。
- 12 同上。
- 13 後年大幅に手入れを施し、改題されて「家長制度」となった。
- 14 『新校本』第二二巻校異篇、1995、p.174、178、180  
上掲書、pp.179-180
- 15 上掲書、pp.175-176
- 16 『新校本』第二二巻本文篇、1995、pp.262-263  
一九二二年一月中旬に出したと推定される書簡。『新校本』第一五巻書簡本文篇、1995、pp.200-202。なお法難の日は旧暦九月二日、新暦一〇月二三日。
- 17 清六が賢治から聞いた話として、〈原稿用紙から字が飛び出して、そこらあたりを飛びまわったもんだ〉がある。宮沢清六前掲書、p.89
- 18 賢治が青森県庁に勤める友人宮本友一に出したものの。『新校本』前掲書簡本文篇、pp.212-213
- 19 上掲書、pp.215-216
- 20 川原仁左工門編著『宮沢賢治とその周辺』、宮沢賢治とその周辺刊行会、
- 21 1972、p.162
- 22 『新校本』前掲書簡本文篇、pp.93-94  
父政次郎への六月二四日付書簡で賢治は本件を報告している。上掲書、p.86
- 23 『新校本』第一六卷（下）補遺・資料年譜篇、p.157
- 24 『新校本』前掲書簡本文篇、pp.68-69
- 25 『新修宮沢賢治全集』第八卷、1979、p.324  
清六は一九〇四年生まれで、賢治の八歳年下である。
- 26 澤村修治編著『宮澤賢治のことば』理論社、2012収録、「ふしぎ先生、宮沢賢治」①～⑤にその一端は記されている。
- 27 七月八日付。堀尾青史「未発表資料 宮沢トシ書簡集」、「ユリイカ」復刊一周年記念七月臨時増刊「総特集 宮澤賢治」収録、同誌p.158
- 28 『新校本』前掲書簡本文篇、pp.96-97  
上掲書、p.95
- 29 実際の出生として八月二七日説がある。
- 30 小泉多三郎「宮沢賢治君を憶ふ」『宮沢賢治研究』二号、1935。『新校本』前掲年譜篇、p.161
- 31 石内徹編『宮沢賢治『銀河鉄道の夜』作品論集』（日本近代文学作品論集成⑨）クレス出版、2001、p.110
- 32 上掲書、p.171
- 33 たとえば、中学を卒業し一度家業に就いた一七歳のとき、〈学校の志望はすてぬ木々の青弱りたる目にしみるころかな〉と心情を短歌に記している。
- 34 『新校本』上掲年譜篇、pp.92-93
- 35 上掲書、p.92
- 36 『新校本』前掲書簡本文篇、p.89
- 37 『新校本』前掲書簡本文篇、p.89

- 41 上掲書、pp.104-105  
 42 上掲書、p.106

43 宮沢清六前掲書、p.89

- 44 高知尾智輝「宮沢賢治の思い出」、『真世界』一九六八年九月号。『新校本』前掲年譜篇、p.218。なお、高知尾と賢治が面談したのは、無断上京事件のあった一九二一年の早い時期と考えられる。童話作家の助走はずでに始まっており、賢治の志向を後押しするエピソードと見られよう。

45 澤村修治『唐木順三』ミネルヴァ書房、2017、pp.296-297

### 参考文献

- 『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房、一九九五～二〇〇九年）  
 『新修宮沢賢治全集』（筑摩書房、一九七九～八〇年）  
 続橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成』（日本図書センター、一九九〇～九二年）  
 関登久也『賢治随聞』（角川書店、一九七〇年）  
 川原仁左工門編著『宮沢賢治とその周辺』（宮沢賢治とその周辺刊行会、一九七二年）  
 根本正義『鈴木三重吉と「赤い鳥」』（鳩の森書房、一九七三年）  
 続橋達雄『賢治童話の展開』（大日本図書、一九八七年）  
 宮沢清六『兄のトランク』（筑摩文庫、一九九一年）  
 堀尾青史『年譜宮澤賢治伝』（中公文庫、一九九一年）  
 石内徹編『宮沢賢治『銀河鉄道の夜』作品論集』（クレス出版、二〇〇一年）  
 福田真人『結核という文化——病の比較文化史』（中公新書、二〇〇一年）  
 社団法人日本児童文芸家協会編『児童文芸五十年のあゆみ』（記念誌、二〇〇五年）  
 國文學編集部編『知っ得宮沢賢治の全童話を読む』（學燈社、二〇〇八年）

澤村修治編著『宮澤賢治のことば——ほんとうの幸をさがしに』（理論社、二〇一二年）

澤村修治『唐木順三——あめつちとともに』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）

\* 澤村修治は本稿筆者の筆名である。

『ユリイカ』復刊一周年記念七月臨時増刊「総特集 宮澤賢治」（第二卷第八号、青土社、一九七〇年）

よこて たくじ：淑徳大学 人文学部 教授